

◇旧年の夏頃から、年忌法要の時、焼香する前に焼香の意味と仕方、そして手の合わせかたを短くお話ししています。何だかわからない粉(香)を、ありがたそうに灰にまいて合掌して、何の意味があるのだろうと思っている人もいるでしょうから。◇合掌といえば、詩人の高田敏子さんに「浅草観音」と題した詩があります。そのなかに次のような一節があります。「右の手の悲しみを／左の手がささえ／左の手の決意を／右の手がうけとめる」。この詩が作られた時代背景などを知るともっと鮮明に言葉が姿を現してくれるのですが、紙面がたりません。恥ずかしながら、くわしくは『またまたおうちで禅』を見て！

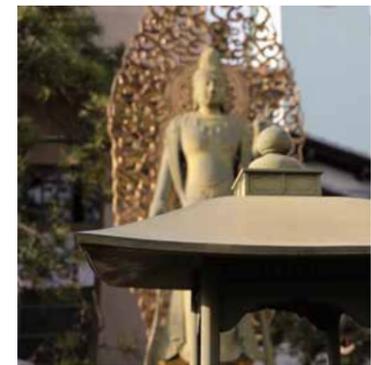
◇とは言え、合掌の仕方を文字で説明するよりも、映像の方が説得力がある。そこで、綺麗な合掌が見られる映像をご紹介します。まずは、昨秋に流れたテレビCM。JR東日本「大人の休日倶楽部」越前和紙の里篇で、吉永小百合さんが紙の神様の前で手を合わせています。さすが美しい。でも、十本の指の間に少しすき間がある。演技でしょうが十本の指はそろえるのが基本です。指がそろった合掌は昨春に放映されたJR東海のCM「いざい

編集後記

「ざ奈良」大和四寺篇での俳優の鈴木亮平さんの姿。基本通りの合掌です。◇もうひとつ、手を合わせる姿がいっぱい出てくる映画を紹介します。是枝裕和監督の「海街(つみまち)day」(2015年)です。映画の予告編からは、こんな言葉が流れてきます。「父に捨てられた三人の姉妹と、父が遺した腹違いの妹の物語」。この映画は、葬儀にはじまって年忌法要、そして家の仏壇の前で、合掌の多い映画です。

◇映画の予告編のせりふをそのまま文字にしたのですが、「腹違いの妹」という言葉にひっかかりました。というのは、昨秋に出版した『またまたおうちで禅』で原稿にあった、「もらい子」という言葉に校正者が(?)をつけました。不適当な表現だから「養子」にせよというのです。突っばる場面でもないから指示に従いました。でも、「もらい子」がアウトならば「腹違い」もまずいと思うけれど、映画監督の強い意志だったのでしょうか。◇そんな本が歳末に新宿の紀伊國屋書店の書架に並べられていました。宗教専門の出版社ではなく、仏教専門の書店ではなく、街の本屋で普通に買える本を出版していただきました。感謝です。

いろいろなハラスメントがあるこの頃です。ハラスメントとは、「人を悩ますこと。地位や立場を利用した嫌がらせ(広辞苑)」のことです。いろいろな嫌がらせがあるのですが、最近読んでびっくりしたのは、「マルハラ」という言葉があるようです。文章を書いて句点、つまり「。」を一つとハラスメントになる、というのです。そんなー、と思うけれど、たとえば、SNSなどで、「お元気でですか。」と書く、書き手が怒っているのではないか。そう感じる読み手もいる。ならば、マルハラでない書き方はないかと、「お元気ですか♡♡♡」と、「。」の替わりに「絵文字」で文節をしめるんだってー！



『芭蕉自筆 奥の細道』(岩波書店)に目がいきました。この本は平成八年に発見された、芭蕉自身が清書した「奥の細道」全文を写真で見ることができま

今野先生は、「日本語において現在と同じように句読点が使われるようになったのは、明治末期頃からだ」といいます。それほど、古い歴史があるものではないんだ。と、思いながら我が書棚をながめます。

綿綿と字を続けるのではなく改行もあります。空白と改行があると句読点がなくとも余白が生まれます。余白があると、情報ではなく読み物になります。

こんなことを書く、「またまた住職がSNSで怪しい情報を仕入れてきたんだろう」なんて思うにちがいない。ちがうんです。マルハラは、令和六年十月十三日付け日経新聞の文化欄に日本語学者の今野真二さんが連載している「句読点の歴史」という文章から教えられました。

あたらしい年、余白のある暮らしをしたいのだが、どうなりますことやら。(住職記)

連続シリーズ「見つけた」

住職の狭い社会のことだけでなく、いろいろな方から教えられることが多いのです。Kさんから聞いた話です。Kさんの父親が九十歳で亡くなった時でした。父親はJRになる前の国鉄に勤めていました。鉄のように時間も生活も堅固に守る方だったという。Kさんは長女です。子どもの頃を思い出して、ぽつりつぶやきました。

「ふつつの家庭の様に日曜日があるようになりズムで育てられた記憶は残っていません」。

それはそうでしょう。友だちが休日家族と一緒に電車に乗ってどこかへ遊びに出かけるときも、父親はその電車を動かすために、休日出勤するのですから。不満も覚えたらうし、恨みもしたでしょう。でも、時間の流れが解決させたのか、ひとりごとのように出た言葉には、不満と恨みが昇華して、誇りが感じられました。



写真 千田完治

私は曜日関係なしに葬儀や法事が入る勤めから、新年の休日探しの楽しみはありませんが、昭和生まれの人間には、祝日が変わるのがピンときません。どういことかという、「敬老の日」は現在九月の第三月曜日だけれど、以前は九月十五日。十月十日だった「体育の日」は「スポーツの日」になって、十月第二月曜日。そして、一月十五日だった「成人の日」が一月の第二月曜日、といった具合に、曜日は定まっています。も日にちは毎年変わります。

それぞれには、歴史的な意味が込められていたにしろ、などという小言をならべるつもりはないのですが、数学者の永田久氏(一九二五〜一九九五)は数学を専門にしながら、暦の研究をしました。

きっかけは、女子大の一般教養課程で、微分積分の講義をするのですが、「文科系の学生は、いっこうに興味を示さない」。そこで、「暦の講義」を始めます。すると、学生の目が輝いてきます。暦は、「民族や天文、宗教などに、数の論理でつながっている部分があることを発見」(永田久著『年中行事を科学する』日経新聞社)します。

宗教とつながる数の論理というのは具体的にいうと、聖書の天地創造は七日間の出来事で、一週間は七日。仏教では亡くなった故人のために、七日ごとに七回追善法要をする。七以外にも十二にもリズムがあります。一年は十二ヶ月で干支は十二年で一巡する。まだまだあるでしょう。これは、洋の東西を問わず、人間の奥底に流れているリズムです。

仏教も、そうしたリズムを大事にします。破調は禁物です。

日々のなかで
見つけた!

住職記